

## 新しい観光の諸相



「新しい観光の諸相」表紙

経済学部教授 大賀 陸夫

またグローバルには観光は21世紀の成長産業とみなされているものの、海外からの日本への来訪者は極端に少ない。そこでわが国でも小泉首相の時代に「観光立国」宣言が行われ、国としてテコ入れをはかるようになった。そして最近、国立大学にもはじめて観光学の講座が設置されるようになった。わがツーリズムコースもそのような時代の流れの中で生まれた。2004年、経済学部ツーリズムコースを新設することが決まったとき、新コースに所属予定の教員が中心となってツーリズム研究会を立ち上げた。以後、観光の現地調査や、研究会・シンポジウムの開催などの活動を続けてきたが、その諸活動の成果をまとめたものが本書である。

新しい観光について調査研究を行い論文を発表するのはやりがいのある仕事であり、またツーリズムコースの教員にとつての義務だとわれわれは考えている。今年度も大学の後援を得て本書と同様の本を出す予定である。できればその次の年も。そのような一連の研究報告の第一弾という位置づけに本書はある。最期に本書の内容の紹介をしなければならぬが、それは目次の掲載で代えさせていただきたい。

これは「私の書いた本」ではなく「私たちの書いた本」である。「私たち」とは香川大学経済学部地域社会システム学科ツーリズムコースの全教員と教育学部の平篤志先生を合わせた9名をさす。タイトルが示すように、本書は「新しい観光」に対して様々な専門的観点から光を当て、そのいろいろな側面を照らしてみようという学際的な試みである。大部分が同一学部には属するとはいえ、専門を異にする者が集まって一冊の本を著したことについて二点説明しておきたい。ひとつは時代の変化によってどちらかというとこれまで日陰の存在であった観光に光が当たっているということ。もうひとつはそれに関連して、国も国立大学も組織的な対応を始めたということである。

たしかに「観光」はずいぶん手垢のついた古びたことばである。どうしても旧来の慰安旅行や修学旅行などのマス・ツーリズムを想起してしまう。そのような観光は、これまで貿易立国をめざすわが国では比較的小さな産業として軽視されてきた。しかし時代は変わった。貿易立国は過去のものとなり、われわれの生活がむしゃらに働いてみんなが慰安旅行に出かけるというものではなくなった。「ものより思い出」というコピーに共感するようになった。そのような時代の変化が観光のあり方にも現れている。エコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズム、観光まちづくりといった新しいことばが登場してきた。観光は単なる遊興ではなく、交流を通じた創造という性格をもつようになっている。観光には経済や経営もあれば歴史や文化もある。それはあらゆる面から考察されるべき現象として浮上してきた。われわれが研究対象としているのもこのような新しい観光である。

序文	阿部文雄
第1章	観光の発生 守矢信明
第2章	観光まちづくりの心 大賀陸夫
第3章	イロケ、アジケ、ヒトケ：観光人類学の視点からみる 長崎と琴平 王維
第4章	観光資源としての文化財 丹羽佑一
第5章	都市住民のグリーン・ツーリズムに関するニーズ分析 原直行
第6章	東かがわ市引田町にみる空間構造と観光者の回遊行動 金徳謙
第7章	四国および香川県における外国人観光客の動向と課題 平篤志
第8章	香川における国際観光の可能性と課題 水野康一
第9章	香川県の瀬戸内海国立公園 稲田道彦